されど、本を読まずして

35 年前に大学の教員になった時、自分の仕事は、まず自分でせっせと本を読み、学生にも本を読ませることだと考えていた。こうして学生の多くが読書の楽しさをおぼえ、進んで本を読むようになれば、講義や演習は学生たちが読書を通じて自ら発見した疑問や意見を交換し、さらに新しい疑問を見つけてその「答え」を探す場所になるだろう。そうなれば、教員は中身のともなわない「大学改革」論議に時間をとられることもなくなり、大学はただ立派な図書館と静謐な読書環境を用意すればよいと夢想していた。

しかし、その後 20 年の間に研究環境が変化し、教育現場でもいわゆるＩＴ化が進んだ。その結果、私自身の日常を振り返っても、もはや本を読むことが研究とは言えない状況になった。現在では、目にする文献資料の多くがインターネットを通じて発見し、プリントアウトしたものであり、書籍の注文にしてからが、オンラインを通じて行われるようになった。私の研究分野(金融論)では、社会科学の他の分野に比べて研究発表のデジタル化が早くから普及し、Social Science Research Network(SSRN)と呼ばれる国際的なネットワークを通じて、雑誌に公表される前のワーキングペーパーが大量に流布するようになった。

1990 年代の前半までは、欧米の大学の最新の研究成果に触れようとすれば、かの地に出向いてしかるべき図書館を訪れ、ワーキングペーパーのコピーを集めなければならなかった。しかし、今では自分の仕事場にいながらにして世界中の最新の論文を簡単に入手することができる。このような状況変化がわずか 10 年ぐらいの期間に急激に進展したために、どのようなテーマであれ、論文を書くのに必要な資料・情報の量はかつてとはケタ違いに増大した。

2007 年に米国のサブプライム問題を契機に世界的な金融危機が発生して以来、すでに 5 年以上にわたってこの問題の推移を追いかけている。今回の金融危機はかつての大恐慌と比較されるほど深刻な資本主義の歴史的危機であることから、世界中の研究者がこの問題を取り上げて論文や記事、さらには報告書等を公表してきた。それらの多くがインターネットを通じて公表されており、この間にプリントアウトした論文・資料の類は数万ページに達している。いずれにしても、もはやインターネットの恩恵に欲することなしにわれわれは現実に生起している問題について最新の知見を得ることは不可能である。

このような仕儀であるから、学生にとっても、もはや本を読むことだけが「勉強」ではないという事情は認めなければならないであろう。しかし、同時に、必要な情報をインターネットを通じて素早く手に入れる作業と、知的関心をそそられる一冊の本をゆっくりと読むという作業とは、われわれの知的作業として明らかに別のものではないであろうか。

読書と言うのは、旅行が単に未知のものを目にするだけの行為ではないように、単に必要な情報を見つけだすための作業ではない。それは私に言わせれば、著者がおそらくは何年もかけて作り上げた知的構築物の内部を見物するのに似ている。読者は、その内部を見渡しながら、著者の意図を探り、想定される意図と眼前に提示された作品との照応関係を

評価し、いままで見落としていた新たな疑問に気づかされ、自分自身を新しい探求に向けてかりたてる知的な刺激を受ける。こうして、読書を通じて、人は《自省》という行為――私には、人間が人間として成長するために欠かせない行為の一つと考えられる――に導かれる。

振り返って私が過ごしてきた大学の状況を考えてみると、大学が若者に人間として成長するための《学習》の機会を提供することから次第に遠ざかり、就職のための条件と便宜を提供する「就職予備校」としての性格を急激に強めている。就職が若者にとって人生の重大事であることは言うまでもないが、大学自身が「就職予備校」であることを自ら目指しているかのような現状は、大学の将来を暗くしていると言わざるを得ない。

みずから進んで本を読もうとしない、あるいは、本を読むことの必要性や喜びを理解できない「成人」を、「最高学府」のレッテルを貼って大量に送り出すだけなら、大学がさらに何十年も存続する意味が果たしてあるのだろうか。本をたくさん読めばすぐれた人間になれるわけではないが、時に本を読んで自分を考え直すことのできる人間を育てることは、やはり大学に付託された重要な社会的使命ではないであろうか。率直に言えば、この課題に真剣に向き合わない大学の次の 100 年後を想像することは、私には困難である。